

『建礼門院右京大夫集』の『枕草子』受容

牧野 裕子

一.

（私家集でありながら日記的⁽¹⁾であり、物語的でもあるという多面的性格⁽²⁾）を有する『建礼門院右京大夫集』の先行作品には、『伊勢物語』⁽³⁾、『源氏物語』⁽⁴⁾、『讀岐典侍日記』⁽⁵⁾、及び『新古今和歌集』所収歌⁽⁶⁾や西行の和歌⁽⁷⁾などがこれまで指摘されてきたが、その一方でこの作品と『枕草子』との関係は比較的論じられてこなかった。管見の限りでは、その先行研究は以下の如くである。はやくは佐佐木信綱氏が、「彼が文には、枕草子を忍ばしむるもの少なからず見ゆ。例へば西八条の花の宴、みあれの頃の藤壺の條、みくしげ殿の事などはた小松のおとゝの直衣姿、権亮維盛の『絵物語に出でしやうに美しくみえし』をしろせるは、かの中宮定子の御はらからを写せる筆づかひも思はれ、高倉帝の笛ふかせ給へるは、か的一条帝のふることも忍ばる」と述べられ、『右京大夫集』の詞書と『枕草子』との関連を指摘された⁽⁸⁾。しかしその後、田中重太郎氏は『右京大夫集』と『枕草子』の関連を具体的に示唆されつつも、結局は「建礼門院右京大夫

集中に清少納言枕草子の直接影響はほとんど見出されないといつてもよいであらう」と結論された⁽⁹⁾。その影響があつてか、以後、『右京大夫集』と『枕草子』との関係は殆ど論じられなかった。それが近年になって、今関敏子氏が右京大夫と清少納言には多くの共通点があると述べられ⁽¹⁰⁾、松本寧至氏も『建礼門院右京大夫集』中の、清少納言のような才女ぶりを示している右京大夫と宰相中将源通宗とのやりとりやぶち犬の思い出は、才女清少納言や翁丸を描いた『枕草子』が思い合せられると述べられ⁽¹¹⁾、『建礼門院右京大夫集』と『枕草子』の関係が再び論じられてきている。稿者もそうした立場から、『建礼門院右京大夫集』一一五番の詞書及び歌「年月の積もりはててもその折の雪のあしたはなほぞ恋しき」には、雪の自然描写と資盛—右京大夫の服飾表現、そして平兼盛歌⁽¹²⁾の引歌表現を媒介にして、『枕草子』一七六段「宮にはじめてまいりたるころ…」と一七九段「雪のいと高うはあらで…」が引用されていることを述べた⁽¹³⁾。そこに『枕草子』がどのように受容されているかという問題は、『右京大夫集』を読む上で看過し難く、『建礼門院右京大夫集』の先行作品としての『枕草子』

の重要度は『源氏物語』以上ではなからうか。

例えば、新村出氏をして右京大夫を「星夜賛美の女性歌人」と評せしめた二五二番歌の詞書を見てみたい⁽¹⁴⁾。

十二月一日ごろなりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、村雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。引き被き臥したる衣を、更けぬるほど、丑二ばかりにやと思ふほどに、引き退けて、空を見上げたれば、ことに晴れて、浅葱色なるに、光ことごとしき星の大きなるが、むらもなく出でたる、なのめならずおもしるくて、花の紙に、箔をうち散らしたるによう似たり。今宵初めて見そめたる心地す。先々も星月夜見なれたることなれど、これは折からにや、ことなる心地するにつけても、ただ物のみ覚ゆ。

252 月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる⁽¹⁵⁾
『建礼門院右京大夫集』の美意識を端的に窺うことのできる一例として数えられる場面である。「ひとへに曇りはてぬ」や「星うち消えしたり」、そして「空を見上げたれば」以下の冬空の描写など、自然描写を中心とするこの場面の美意識は視覚に訴える構成に支えられている。このことは『右京大夫集』の自然についてのみならず、この作品全体に指摘できる傾向である⁽¹⁶⁾。例えば『右京大夫集』は料紙の色目に細かく配慮し、その美調を随所に記すが、それも「紅の薄様」(五九・七〇番)、「白き薄様」(六〇番)、「縹の薄様」(七七番)、「菖蒲の薄様」(八

二番)、「花たちばなの薄様」(八三番)などと色彩を重視して記録されている。確かに『右京大夫集』中には、「はなたちばなの、雨晴るる風にはほひしかば」(八一番)や「秋にもややなりぬ。風の音はさらぬだに身にしむに」(一六七番)、「蝸は繁き梢にかしましまで鳴きくらすも」(二二二番)など、嗅覚や聴覚に訴える自然描写もあるが、しかしそれらは特に際立った美的感覚とは云い難い。つまり、『右京大夫集』の自然描写・文物描写にみられる美意識は概して視覚表現において優れているのである。更に述べれば、そうした『右京大夫集』の総合的な美意識には『枕草子』との類縁が見出せるのではなからうか。

以下、『右京大夫集』の具体的な場面を四つ取り上げ、『枕草子』との関連を述べたい。

二.

つくづくと行ひて、ただ一筋に見し人の後の世とのみ祈らるるにも：外面を立ち出でて見れば、橋の木に、雪深く積もりたるを見るにも、いつの年とや、大内にて、雪のいと高く積もりたりしあした、宿直姿のなればめる直衣にて、この木に降りかかりたりし雪を、さながら折りて持ちたりしを、「など、それをしも折られけるにか」と申ししかば、「わが立ちならす方の木なれば、契りなつかしくて」と、言ひし折、ただ今

と覚えて、悲しきことぞ言ふ方なき。

248 たちなれし御垣の内のたちはなも雪と消えにし人や恋ふらむ

と、まづ思ひやらるる。この見る木は、葉のみ茂りて色もさびし。

249 言問はむさつきならでもたちばなに昔の袖の香は残るやと

詞書に資盛が登場する、最後の資盛追想記事である。生前の資盛から自分の亡き後、菩提を弔って欲しいと委託されていた右京大夫は「つくづくと行ひ」をしているとき、雪が深く積もった庭の橘の木に更に雪が降りかかっている景色を目にした。その橘の木を見るにつけ、昔日の雪の朝、直衣姿の資盛が「わが立ちならず方の木なれば、契りなつかしくて」と橘の木を一枝折って持つて来たことが回想されるという。一一五番歌の詞書——こちらは、詞書に資盛が登場する最初の資盛追想記事であった——の場合も、雪の自然描写が『枕草子』を受容するための重要な媒介の一つであったが、当該場面の雪にも同様な意味が見出されないであろうか。

和歌の伝統表現として橘は懐旧の心象を有する景物であるが、その場合多くは初夏五月の橘であり、時鳥とともに使用される場合が多い。ここでも『古今集』の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」は踏襲されており、右京大夫は「昔の袖の香は残るやと」と、「橘」に「袖」を取り合せて詠歌している。しかし、この場面には冬の橘が描かれており、橘の白い花の代わりに「雪」が取り合されている点がこの作品独自の趣向である。この独自性は、どのように構築されている

るのであろうか。

『右京大夫集』に浮舟物語の投影が指摘されていることを思えば⁽¹⁷⁾、この場面からは浮舟巻の雪に圍繞された橘の小鳥の場面が想起されなくもないが、しかし引用本文の傍線を付した「雪深く積もりたる」雪のいと高く積もりたりしあした」という表現に注意したい。これは、資盛追想記事を雪に始まり雪に終わらせようとする『右京大夫集』独自の論理に支えられた叙述であり、大切な虚構化の一方法と云える表現なのではなからうか。弓削繁氏はこの雪の描写に着目され、降雪が際立ったという治承二年正月二十三日の朝を史実から炙り出し、この詞書の素材的事実かと論じられたが⁽¹⁸⁾、この表現からは、左の如く諸段の至るところに多様な雪が描かれている『枕草子』世界が想起されよう。

A 雪のいと高うはあらで、薄らかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。また、雪のいと高う降り積りたる夕暮より、端近う、同じ心なる人、二、三人ばかり、火桶を中に据えて物語などするほどに：おほかたの雪の光いと白う見えたるに：をかしけれ。

(一七六。「雪のいと高うはあらで：」⁽¹⁹⁾六三—六四)

B 村上の先帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明きに、「これに、歌詠めいか言ふべき」と、兵衛の藏人に賜はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。

(一七七。村上の先帝の御時に：⁽²⁰⁾六四)

C 雪高う降りて、今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう、若やかなるが、袍の色いときよらにて、革の帯のかたつきたるを、宿直姿にひきはこえて、紫の指貫も雪にさへ映えて濃さまさりたるを着て：風のいたう吹きて、横さまに雪を吹きかくすれば：雪のいと白うかかりたるこそ、をかしけれ。

(二三三)「雪高う降りて、今もなほ降るに：」①一〇七

D 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まありて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪、いかならむ」と、おほせらるれば、

(二八四)「雪のいと高う降りたるを：」①一五二

『枕草子』にとって、雪は重要な自然であった⁽²⁰⁾。「雪のいと高うあらで」「雪のいと高う降り積りたる夕暮」(以上、A)、「雪のいみじう降りたりけるを」(B)、「雪高う降りて」「雪のいと白うかかりたる」(以上、C)、「雪のいと高う降りたるを」(D)などは『枕草子』に極めて特徴的な表現であるといえよう。更に述べれば『枕草子』にて雪は重要な自然であるとともに、中関白家が没落した後の定子サロンを描く後期日記的章段に特徴的な自然であった⁽²¹⁾。『枕草子』は意識的に主家の没落による寂寥を描かないけれども、そこで不遇の中宮定子サロンが雪を多用して描かれていることと『右京大夫集』で平氏滅亡後に回想される故資盛の生前の姿が雪とともに描かれていることから、この二つの作品の間に一つの系譜を読み取ることができるのではなからうか。

壇ノ浦で入水し、今は現実に「雪と消えにし人」となった資盛と共に過ごした昔日の〈時間〉は、それこそ儚い日々ではあったが、右京大夫にとってやはり美しい時間でもあった。過去には存在していたその〈時間〉を詩的に回想して対象化するとき、右京大夫は『古今集』

が確立した和歌の伝統表現に拠ると同時に、『枕草子』にも拠って叙情世界を構築しているのである。かつて清少納言は「橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまに、をかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたる朝ぼらけの桜に劣らず。」(「木の花は：」①五八)と述べ、四月末から五月一日頃の橘の花の美しさは桜以上であると賞賛していた。しかし今、右京大夫が目にする冬の橘には雪こそ積もっていても当然花の咲いている筈がない。「雪と消えにし人」を「恋ふ」彼女は、一人見る橘を見て「この見る木は、葉のみ茂りて色もさびし」という。この一文には、回想時(作品現在)と資盛が存在した過去、そして『枕草子』が成立した一条朝時代という、三様の時間の重層構造が認められる。『右京大夫集』の作者は、「さびし」き橘の和歌史における伝統的な懐旧のコードに『枕草子』における雪の〈意味〉——中宮定子サロンは、主家が没落してなお定子や才気ある女房らの機知に支えられ、雪の美に象徴されるような理想的なサロンであり続けていた——を取り合わせ、自己が追懐する過去の世界を『枕草子』世界に重ねた上で現在時に再現させているのである。資盛追想記事の「いわゆる創作」⁽²²⁾とは、『枕草子』受

容に始まり『枕草子』受容に終わっているといえよう。

ただ、作者は必ずしも自己と資盛が共有した時間のみを『枕草子』世界に重ね合せようとするわけではないようである。次章で、もう一例見てみたい。

三.

『右京大夫集』冒頭には、高倉天皇治世の承安四年正月一日の高倉天皇と中宮徳子が並ぶ後宮が描かれ、その直後に同年春の内裏の様子が描かれている。序文で作者は、この集は他見を予想した家集ではないと断っているが、この辺りにはやはり主家・主人の礼賛を志向する女房日記の論理が認められよう⁽²³⁾。三番歌の詞書を見てみたい。

同じ春なりしにや、建春門院内裏にしばし候はせおはしまし
しが、この御方へ入らせおはしまして、八条の二位殿御参り
ありしも御所に候はせたまひしを、御匣殿の御後ろより、お
つおづちと見まゐらせしかば、女院、紫のほひの御衣、山
吹の御表着、桜の小桂、青色の御唐衣、蝶をいろいろに織り
たりし召したりし、言ふ方なくめでたく、若くもおはします。
宮は、つばめる色の紅梅の御衣、樺桜の御表着、柳の御小桂、
赤色の御唐衣、みな桜を織りたる召したりし、にほひあひて、
今さらめづらしく、言ふ方なく見えさせたまひしに、大方の
御所の御しつらひ、人々の姿まで、ことにかかやくばかり見

えし折、心にかく覚えし。

3 春の花秋の月夜をおなじ折見る心地する雲の上かな⁽²⁴⁾
折から参内中であつた、高倉天皇の生母であり、後白河法皇の寵妃でもある建春門院平滋子が中宮の御局を来訪し、滋子の異母妹となる平時子とその女の徳子中宮と対面する場面である。全盛時代の平家を描く場面であるといえよう。このときの徳子の服飾について、『枕草子』一〇〇段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」中の原子の服飾との類似が指摘されているが⁽²⁵⁾、この詞書と『枕草子』との連関は徳子―原子二人の服飾表現のみに認められるのであろうか。右京大夫は、女院と中宮の「にほひあ」ふ様子を「御匣殿の御後ろより、おづおづちと見まゐらせ」という。「おづおづち」と覗き込んだことからして、これを若き日の右京大夫が出仕して間もなくの慣れない出来事に遭遇したためと読むことは短絡であろう。『右京大夫集』に「めでたき」の用例はわずか二例であり、「匂い合ふ」の用例はこの一例のみである⁽²⁶⁾。建春門院と中宮徳子のめでたき様子が服飾を中心に表現されていること、この日のために磨き整えられた「御しつらひ」が輝かしいほど美しいとすること、そして華美に装っていたであろう女房たちの存在も一言ながら書き添えられていることからこの詞書全体に『枕草子』一〇〇段の一場面が内包されていると解したい。やや長くなるが、『枕草子』を引用する。

淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど、いかがめでたからぬことなし。正月十日にまゐりたまひて、御文などはしげう通へ

ど、まだ御対面はなきを、二月十よ日、宮の御方にわたりたまふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心異にみがきつくりひ、女房など皆用意したり。…御しつらひはしたり。…女房いと多くさぶらふ。まだこなたにて御髪などまゐるほど、「淑景舎は、見ためまつりたりや」と問はせたまへば、「まだいかでか。積善寺供養の日、ただ御後はかりをなむ、はつかに」と聞こゆれば、「その柱と屏風とのもとに寄りて、わが後より、みそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」と、のたまはするに、うれしく、ゆかしさまざりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣三重が上に、ただひき重ねてためまつりたる。…ただ、いとぞめでたく見えさせたまふ。ためまつる御衣の色ことに、やがて御容貌のほひあはせたまふぞ、なほ、ことよき人もかうやおはしますらむと、ゆかしき。…やがて御屏風に添ひつきてのぞくを、…上は、白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり、ひきかけて、奥に寄りて、東向きにおはすれば、ただ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は：紅梅いとあまた、濃く薄くて、上に濃き綾の御衣、すこし赤き小桂、蘇芳の織物、萌黄の若やかなる固紋の御衣ためまつりて、扇をつとさし隠したまへる、いみじう、げにめでたくうつくしと見えたまふ。…めでたき御有様をうち笑みつつ、…淑景舎のいとうつくしげに、絵に描いたるやうにて居させたまへるに、宮はいと安らかに、今すこし大人びさせたまへる御けしきの、紅の御衣に光りあはせたまへる、なほたぐ

ひはいかでか、と見えさせたまふ。(一〇〇。「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」)①一四〇—一四二)

中宮定子の妹原子は、当時の東宮である居貞親王(後の三条天皇)の後宮に入内し、淑景舎女御と呼ばれていた。その彼女が入内後初めて中宮定子の住む登花殿を来訪し、道隆・貴子夫妻、伊周とその長男松君(後の道雅)、隆家などが同席している。そこに道隆六男周頼を使い東宮から原子へ文が届けられ、原子がその返事をなかなか認められずにいる様子が描かれている。そしてその後一条帝もこの場に來臨されるといふ、中関白家にとつて実に晴れがましい一日のことであった。しかしながら『枕草子絵巻』にも見られるこの日は、清少納言の主家の最後の落日の栄光となった日でもあった。『枕草子』には定子と原子の他にも道隆と貴子の服飾表現があり、建春門院・中宮徳子の服飾と定子・原子の服飾の色目や模様も完全に一致するわけではない。この辺り、『右京大夫集』の作者は女房日記の一性格通りに現実に忠実な実録を志向し、その日の建春門院と中宮の服飾を忠実に描いているのかもしれない。しかし『枕草子』にも「匂ひ合ふ」の用例は当該場面の一例の他、二五六段「関白との二月廿一日に…」の一例の計二例のみである(27)。二五六段の場合も「女房装束のほひあひていみじきを」と、「匂ひ合ふ」の語がやはり服飾表現に使用されている点には注意すべきであろう。『建礼門院右京大夫集』には「匂ひ合ふ」女院と徳子の様子が服飾を中心に描かれており、『枕草子』には淑景舎と定子の「紅の御衣に光りあはせたまへる」様子が描かれている。『右

京大夫集』三番歌の詞書は、服飾表現を中心に主家の栄華を描出するという『枕草子』の手法を撰取しよう。又、中関白家側もこの日のためにかねてより「常よりも御しつらひ心異にみがきつくろひ」て「御しつらひはしたり」と、入念に準備していたらしく、この華やかな日に「いと多くさぶら」う女房たちも「皆用意したり」と記されている。引用を省略したが、定子もまた「紅梅には濃き衣こそ、をかしけれ。え着ぬこそ、くちをしけれ。今は紅梅は着でもありぬべしかし。されど、萌黄などのにくければ。紅に合はぬが」と、この日の自己の衣装の色目を調えることに実に熱心であった。そして当日の朝の、原子来訪前の中宮と清少納言の会話は以下の通りである。定子は、原子をまだかすかにしか拝見したことがないという清少納言に、それならば「その柱と屏風とのもとに寄せて、わが後よりみそかに見よ」と仰せられた。そして清少納言は、来訪した原子の様子を中宮の言葉そのままに「やがて御屏風に添ひつきてのぞ」き、その御様子を「いみじう、げにめでたくうつくし」と思う。

右京大夫は、建春門院と建礼門院を中宮定子と原子姉妹に、昔日の自己の姿を清少納言に重ねているのである。

四.

次に、先述した二例ほどには判然と『枕草子』を受容していると言いきれないかもしれないけれども、その可能性も捨て難い事例を二例

挙げたい。

一つは、作者が建礼門院に出仕していた頃の五月五日、菖蒲の節句のことである。

五月五日、宮の権大夫時忠のもとより、薬玉まきたる筥の蓋に、菖蒲の薄様敷きて、同じ薄様に書きて、なべてならず長き根を参らせて、

82 君が代に引きくらぶればあやめ草長してふ根も飽かずぞありける
返し 花たちばなの薄様にて

83 心ざし深くぞ見ゆるあやめ草長きためしに引ける根なれば⁽²⁸⁾

五月五日に菖蒲を葺いて薬玉を配り和歌を贈答することは、ごく一般的な年中行事の一であり、格別この段に作品の独自性はないのかもしれない。『栄花物語』にも「はかなく五月五日になりぬれば…軒のあやめもひまなく葺かれて、心ことにめでたくをかしきに、御薬玉、菖蒲の御輿などもてまゐりたるもめづらしうて、若き人々、見興ず。」(巻六、「かかやく藤壺」I三二六)という、類似する叙述がある⁽²⁹⁾。しかし『右京大夫集』には、五月五日の記録はこの他に三二七番と三三三番の詞書の二例が見られるものの、そこでは八二番歌の詞書が持つ明るさは既に失われている。その二例は、資盛の入水と平家の滅亡が語られた後の五月五日のことであった。かつてその長き根に徳子や平氏の末長き繁栄を寿いでいた菖蒲やあやめ葺きの屋根は、そこでは追憶の契機でしかない長き「憂きね」となってしまうている。その二例に華やかな薬玉は見られず、『栄花物語』引用部には和歌がない⁽³⁰⁾。

そのため、薬玉や和歌を記す八二番歌の詞書の世界からは次の『枕草子』世界が想起されるのである。

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなす。若き人々、御匣殿など、薬玉して姫宮、若宮につけたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉ども、ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を持て来たるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて、「これ、籬越しにさぶらふ」とて、まゐらせたれば、

皆人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

(二二三)「三条の宮におはしますころ」(一〇〇)

冒頭の「三条の宮におはしますころ」の一文は、この章段が中関白家没落後の定子の不遇時代を記すことを示している。事実、この段は定子最晩年の五月のことであり、このとき嫡子内親王を懐妊中であつた定子はその後一条帝と再会することはなかつた。定子を皇后に転上し、彰子が一条帝の新中宮としての入内を準備していた当時の時代背景を思えば、定子の和歌は確かに心細さを詠み込んだ歌のようにも解され、本章段には翳りがあると云えようか⁽³¹⁾。しかし、そうした時代背景をあえて無視して読むならば、定子所生的一条帝皇子女が珍しくも登場するこの場面は定子の心細さや中関白家側の不遇感・寂寥感が全く読み取れない明るい場面となるように描かれている。その意味において、ここは最も『枕草子』らしい場面であるといえよう⁽³²⁾。

五月五日、「五日の菖蒲の輿」とともに薬玉が運ばれてきて、年若い女房たちや定子の実妹御匣殿が脩子内親王と敦康親王にそれを献上している。そして他にも「いとをかしき薬玉」とともに「青ざしといふもの」も運ばれてきたため、清少納言はそれを定子に「青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて」献上したという。『建礼門院右京大夫集』に見えた「菖蒲の薄様」とは即ち青色の薄様紙のことであり⁽³³⁾、その紙に和歌を認めること及び薄様紙を硯・笥の蓋に敷くという行為までもを『建礼門院右京大夫集』と『枕草子』とが共有していることは偶然であろうか。五月五日を描いた他作品に、菖蒲が飾られる五月五日に薬玉とともに硯・笥の蓋に青色の薄様を敷いてそこに和歌を認め贈答するという、二作品が共有する詳細部⁽³⁴⁾が一致する例がないことから⁽³⁴⁾、『右京大夫集』三二七番歌の詞書が『枕草子』を受容している可能性を示唆しておきたい。

最後に、建礼門院が春、西八条の清盛邸に退出された折、平家の君達らが宴をした場面を見てみたい。『平家公達草紙』との影響関係が論じられてきた箇所である⁽³⁵⁾。

春ごろ、宮の、西八条に出でさせたまへりしほど、…花の盛り、月明かりし夜、「あたら夜を、ただにや明かさむ」とて、権亮朗詠し、笛吹き、経正琵琶弾き、御簾の内にも琴掻き合せなど、おもしろく遊びしほどに、内より隆房の少将の御文持ちて参りたりしを、やがて呼びて、さまざまのことども尽くして、のちには、昔今の物語などして、明け方までながめ

しに、花は散り散らず同じにほひに、月もひとつに霞みあひ
つつ、やうやう白む山際、いつと言ひながら、言ふ方なくお
もしろかりしを、：

95 かくまでのなさけ尽くさでおほかたに花と月とをただ見ましだに
…少将かたはらいたきまで詠じ誦して：

佐佐木信綱氏の云われる『枕草子』の影響が読み取れる「西八条の花
の宴」⁽³⁶⁾とは、この場面のことであろう。管弦の遊びのある宴の場
面としてはごく自然な描写であり、前節で見た場合と同様にこの詞書
にも特に作品の独自性はなさそうである。しかし先の場合のように、

ありがちな場面であるとはいえ『右京大夫集』の本文とどこまで
詳細部が一致する場合が他作品に見出せるであろうか。『後撰集』には、
琴笛などしてあそび、物語などし侍りけるほどに、夜ふけに
ければ、まかりとまりて

昨日見し花の顔とて今朝見れば寝てこそさらに色まさりけれ
（後撰集・春・一二八・三条右大臣）⁽³⁷⁾

とある。ここには「琴」「笛」「遊び」「物語」の語があり、詞書の場
面設定も『右京大夫集』と同じ夜のことではあるものの、「琵琶」は
書かれていない。『源氏物語』少女巻の放鳥の試みの段には、「琵琶」「和
琴」「箏」「琴」が演奏され「大御遊び」の語もあるが、「笛」「誦ず」
の語がなく、梅枝巻の月前の酒宴の場合も「誦ず」の語がない。そこ
で諸注の指摘するように⁽³⁸⁾、傍線を付した「やうやう白む山際」の
表現が『枕草子』冒頭の「春は、曙。やうやう白くなりゆく、山ぎは

すこし…」（二、「春は、曙…」⁽¹⁵⁾）の一文を受けていると解する
ならば、同時に次の段との関連も——『平家公達草紙』との関連とは
又別の次元において——認定すべきではなからうか。

雨いたう降りてつれづれなりとて、殿上人、上の御局に召して、
御遊びあり。道方の少納言、琵琶、いとめでたし。済政、箏の琴、
行義、笛、経房の中将、笙の笛など、おもしろし。一わたり遊び
て、琵琶弾きやみたるほどに、大納言殿、「琵琶、声やんで、物
語せむとすること遅し」と誦じたまへりしに

（七七、「御仏名のまたの日…」⁽⁹⁰⁾）
『右京大夫集』の「内より隆房の少将の御文持ちて参りたりし」の一
文も、内容上、先に見た『枕草子』一〇〇段を彷彿とさせるし⁽³⁹⁾、
管見の限りでは「（御）遊び」「琵琶」「琴」「物語」「誦ず」「笛」など
の語と背景を共有する場面を他作品に見つけられない⁽⁴⁰⁾。西八条の
宴の場面にも、『枕草子』初段と七十七段が受容されているのではな
からうか。

結び。

『建礼門院右京大夫集』はその絵画的世界を形成するにあたり、随
所に『枕草子』を受容している。平氏の栄華を追懐し、再現するこの
作品には枕草子絵巻が内包されているのである。今回、稿者が気づき
得る全ての例を挙げたが、少なくとも本稿で見た限りにおいては、『建

「礼門院右京大夫集」が『枕草子』を受容する場合は、平氏の栄華の回想や資盛との恋が対象化される場合に限定されている。作者にとつて資盛との恋は名門平家の君達との恋であり、生前の彼を賞賛することは平氏礼賛の姿勢と不可分の関係にある行為なのである。又、時の帝の寵妃であり中宮であつた徳子に仕えた自己の作品を、一条帝の寵妃であつた中宮定子に仕えた清少納言が遺した作品と同じ系譜の上に位置づけようとする意図も読み取られよう。『右京大夫集』とは対照的に、平安朝文学史の中で孤立したジャンルの作品と云われる『枕草子』ではあるが、この作品も主家・主人を礼賛し、栄華の顕彰録たろうとする女房日記の側面も併せ持っている。『枕草子』の時間を切断して視覚に訴える構成を特色とする美意識は、『建礼門院右京大夫集』にも継承されているのである。

【注・参考文献】

- (1) 山口達子氏「建礼門院右京大夫集に於ける詩と散文」(『人文論究』第一巻第一号 一九六〇年七月)、糸賀きみ江氏「建礼門院右京大夫集の日記文芸的性格」(『文芸』第三七集 一九六一年三月)、後に『中世の抒情』(一九七九年)に所収。渡辺静子氏「建礼門院右京大夫集」の特質」(『東洋大学大学院紀要』第一集 一九六四年三月)、小島道子氏「建礼門院右京大夫集の構想に関する一試論」(『名古屋大学国語国文学』二二号 一九六七年十一月)、隣佳子氏「建礼門院右京大夫集」の日記的性格」(『広島大学院大学国語国文学誌』第一〇号 一九八〇年十二月)、今関敏子氏「日記文学における回想と虚構——『建礼門院右京大夫集』を中心に——」(『日本文学』vol.33 一九八四年十二月)、後に『中世女流日記文学論考』(和泉書院 一九八七年)に所収。糸賀きみ江氏「建礼門院右京大夫集」の日記文学的性格」および西沢正史氏「建礼門院右京大夫集」の世界への窓」。共に『女流日記講座第六巻 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』(勉誠社 一九九〇年)。大井善壽氏「建礼門院右京大夫集」——「家の集」と回想の歌日記——」(『解釈と鑑賞』六二巻五号 至文堂 一九九七年五月)、森本元子氏「宮廷からの離陸」(『国文学』第二四巻一〇号 学燈社 一九七九年八月)。
- (2) 久保田淳氏「平家文化圏の文学」(『日本文学史』3 中世 学燈社 一九七八年)。
- (3) 井上宗雄氏「家の意識」(『国文学』第二四巻一〇号 学燈社 一九七九年八月)、上原小代子氏「建礼門院右京大夫集」における表現の広がり

——『伊勢物語』世界のとりこみの効用——」（徳島大学国語国文学」第
一号 一九八八年三月）。

(4) 樋口芳麻呂氏「隆信と右京大夫の恋」（『国語国文学報』三〇号 一九
七六年十一月）、秦恒平氏「意地」の家集と『遊女』の小説——女流日記
の行方」（『国文学』第二四卷一〇号 学燈社 一九七九年八月）、大倉比
呂志氏「建礼門院右京大夫集」考——資盛との雪の朝にまつわる記事
めぐって——」（『文芸研究』六六号 一九八七年十二月）、家永香織氏「建
礼門院右京大夫集」試論——二つの恋をめぐって——」（『国語と国文学』
第七二巻第三号 至文堂 一九九五年三月）、津本信博氏「建礼門院右京
大夫集の悲恋——王朝物語への往還」（久保朝孝氏編『悲恋の古典文学』
世界思想社 一九九七年）。

(5) 注(4)の大倉論文。福田百合子氏「建礼門院右京大夫集研究」（『日
本文芸の世界』桜楓社 一九六八年）、注(1)の隣論文。

(6) 樋口芳麻呂氏「和歌史と自己表現」（『国文学』第二四卷一〇号 学燈
社 一九七九年八月）。

(7) 同注(6)。稲田利徳氏「西行の家集と『建礼門院右京大夫集』」（『西
行の和歌の世界』笠間書院 二〇〇四年）。初出は、『中世文学研究』八（一
九八二年八月）。松村洋二郎氏「建礼門院右京大夫の西行歌撰取」（『日本
文芸研究』第五六巻第四号 二〇〇五年三月）。

(8) 「建礼門院右京大夫」（『佐佐木信綱歌学著作覆刻選第一巻 歌学論叢』
本の友社 一九九四年）。

(9) 「右京大夫集に『枕』をたづねて」（『清少納言』白揚社 一九四八年）。

『建礼門院右京大夫集』の『枕草子』受容 牧野 裕子

(10) 今関敏子氏「月——徳子の存在及び星に連関して——」（『作者の自己意
識について』（『中世女流日記文学論考』和泉書院 一九八七年）。前者論
文の初出は、『建礼門院右京大夫集に於ける月——徳子の存在及び星に連
関して——』（『国文』第四九号 一九七八年七月）、後者論文の初出は、『建
礼門院右京大夫集論——作者の自己意識について——』（『国文』第四六号
一九七七年一月）。

(11) 追憶に生きる 建礼門院右京大夫」（新典社 一九八八年）。

(12) 山里は雪ふりつみて道もなし今日来む人をあはれとは見む（拾遺集・冬・
二五一・平兼盛）。

(13) 拙稿「源氏物語」賢木卷の藤壺と中宮定子——後代文学作品の『枕草
子』受容から——」（『岡大國文論稿』第三十四号 二〇〇六年三月）。なお、
拙稿において見落としていたが、『右京大夫集』一一五番歌と『枕草子』
一七六段との関連は、鈴木栄子氏「いとなまめかしくみえし致——建礼門
院右京大夫集より——」に既に指摘があった。（『跡見学園国語科紀要』二
八 一九八〇年三月）。

(14) 「星空養美の女性歌人」東洋文庫（『南蛮更紗』平凡社 一九三三年）。
初出は、一九三二年八月（雑誌名不明）、新村出集『自然との対話』に
所収。

(15) 本文は、『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集』とはずがたり
（小学館）に拠る。所収歌の上に歌番号を付した。

(16) 注(10)の今関氏「月——徳子の存在及び星に連関して——」は、総
じて右京大夫集には音がないと述べられ、右京大夫に「視覚的な資質」を

指摘される。しかし右京大夫の筆には、笛の名手夕霧女らしい優れた聴覚表現を認めてよいであろう。

(17) 注(4)の樋口論文と家永論文は、『右京大夫集』の作者は自己を浮舟に准えていると説く。

(18) 弓削繁氏『建礼門院右京大夫集』小考——雪の朝の橘の追想記事をめぐる——(『岐阜大学国語国文学』第三十一号 二〇〇四年十二月)。

(19) 本文は、『新版枕草子上・下巻』(角川文庫ソフィア)に拠る。章段番号の下に上・下巻の別を丸で囲んだ漢字で示し、その下に頁数を漢数字で示した。

(20) 注(13)の拙稿。注(9)の田中論文も清少納言は「雪、雪の日、雪の夜」を好むと述べられる。

(21) 注(13)(20)の拙稿。

(22) 大林潤氏『建礼門院の思い出』(『呉工業高等専門学校研究報告』一九八三年二月)。

(23) 宮崎莊平氏『女房日記の論理と構造』(笠間書院 一九九六年)参照。

(24) 後に引用する『枕草子』の本文と共通する「めでたき」「匂ひ合ふ」「御しつらひ」の三語を四角で囲み、服飾表現に波線を、他の特徴的な表現に一重線を付した。後の『枕草子』の引用本文も同様である。

(25) 片岡智子氏『建礼門院右京大夫集』における服飾表現』(『ノートルダム清心女子大学紀要』(国語国文学会編) 八巻一号 一九八四年三月)。

(26) 伊狩正司氏『建礼門院右京大夫集』校本及び総索引』参照。

(27) 榎原邦彦編『和泉書院索引叢書33 枕草子』本文及び総索引』参照。

(28) 後に引用する『枕草子』と共通する言葉や特徴的な表現に傍線を付した。後の『枕草子』の引用本文も同様である。

(29) 本文は、『新編日本古典文学全集 栄花物語』に拠る。巻名下に巻数をローマ数字で、頁数を漢数字で示した。

(30) 『栄花物語』には、他に巻第十二「たまのむらぎく」(Ⅱ七四―七五)、巻第十四「あさみどり」(Ⅱ一五二)、巻第二十二「とりのまひ」(Ⅱ四一〇)、巻第三十四「暮まつほし」(Ⅲ三一五―三二六)の四場面において五月五日、薬玉の贈答とともに和歌が詠まれているが、いずれにも『右京大夫集』との類似性は認められない。『栄花物語本文と索引』(武蔵野書院)参照。

(31) 但し、この定子歌は相当複雑な意味を有するかと推測されており、本稿で明言することは避けたい。注(19)書下巻二七七頁[補注二〇二]、藤本宗利氏「三条の宮におはしますころ」の歌語り」(『枕草子研究』二〇〇二年)。初出は、「籬越しの歌語り——「三条の宮におはしますころ」の段をめぐる」(『常葉国文』二〇号 一九九五年一月)、同氏『感性のきらめき 清少納言』(新潮社 二〇〇〇年)。

(32) 注(31)の藤本氏「三条の宮におはしますころ」の歌語り」参照。

(33) 『菖蒲の薄様』について、『建礼門院右京大夫集評解』は「表青または白、裏紅梅」と、『集成』が「表萌黄・中倍薄様・裏紅梅。表萌黄・裏紅梅とも」と注している。「評註建礼門院右京大夫集全釋」も「表青、裏濃い紅梅」と解した上で、紅葉や菖蒲の薄様を単に赤、緑の薄様とみるべきではないとしている。表裏で色が相違する点、『枕草子』の「青き薄様」との相

違点ではある。

- (34) 『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『竹取物語』『篁物語』『多武峯少将物語』『堤中納言物語』『宇津保物語』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『栄花物語』『更級日記』『大鏡』『狭衣物語』『讀岐典侍日記』を各索引を用いて調査した。歌集については、『新編国歌大観』索引で確認した。いずれも各索引に「(五月)五日」「(御)薬玉」「菖蒲」「薄様」「硯」「筥」「蓋」の語を調査した。

- (35) 渡辺真理子氏「建礼門院右京大夫集」と「平家公達草紙」(『福岡教育大学国語国文学会誌』一六号 一九七三年十二月)、藤田一尊氏「平家公達草紙」の成立に関する一考察——『建礼門院右京大夫集』を資料として——(『日本文学研究(大東文化大学)』二十七号 一九八八年三月)、丹下暖下氏「建礼門院右京大夫集」前半部の構成(『詞林』第三十八号 二〇〇五年十月)。

- (36) 同注(8)。

- (37) 本文は、『新日本古典文学大系 後撰和歌集』に拠る。

- (38) 『建礼門院右京大夫集詳解』『評註建礼門院右京大夫集全釋』、久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈・十」(『国文学』第一四卷一—号 学燈社 一九六九年八月)は『枕草子』冒頭の影響を断定し、『集成』と『新編全集』はその可能性を疑問形で示す。

- (39) 『枕草子』一〇〇段では、周頼が東宮の使いとして原子に文を届けていた。

- (40) 各索引に「(御)遊び」「遊ぶ(動詞)」「笛」「琵琶」「琴」「物語」「(う

『建礼門院右京大夫集』の『枕草子』受谷 牧野 裕子

ち)誦す」の語を調査し、注(34)の諸作品を調査した。歌集についても注(34)に同様である。